

## 第7回北杜市立小中学校適正規模等審議会 会議録

1. 会議名：第7回北杜市立小中学校適正規模等審議会
2. 日 時：令和3年7月5日（月）午前10時00分～午後0時6分
3. 場 所：北杜市役所西会議室
4. 出席者：  
（委 員）清水一彦・川村めぐみ・日永龍彦・清水精・向井伊三男・  
芝川又和・小澤浩・岡安祐樹・金谷裕司・望月智恵子・  
矢崎茂男・小池雅美・細川英雄・瀧澤真・高木ひとみ  
（事務局）興水教育長・加藤教育部長・佐野教育部参事・平井教育総務課長・  
田中指導監・天池総務担当リーダー・安部施設担当リーダー・  
原学校教育担当リーダー・総務担当柳澤
5. 議事  
（1）第1回北杜市立小中学校適正規模等検討市民ワークショップの結果について  
（2）小・中学生へのヒアリングの結果について  
（3）第2回北杜市立小中学校適正規模等検討市民ワークショップについて  
（4）その他
6. 公開・非公開の別：公開
7. 傍聴人の数：3人
8. 議事録署名委員：日永委員、清水精委員

### 議 題

- （1）第1回北杜市立小中学校適正規模等検討市民ワークショップの結果について  
（会 長） それでは事務局に説明を求める。

（事務局） （事務局より資料を用いて説明）

（委 員） ワークショップを3箇所見学させていただいた。非常に活発な意見が出ていたと思ったが、今後のワークショップの在り方も含めて、今回のまとめに出てきていない部分について話をさせていただきたい。  
資料③で「教育水準の維持・向上の考え方」に入りつつあるが、施設をどうするかプラスどういう教育を行うのかを組み合わせで考えないと、選択肢の絞り込みは出来ないという意見は何箇所かで出ていたと記憶してい

る。垂直統合案のデメリットは確かに残るが、背景・前提として、ICTで学校を繋ぐということをもって、少人数の固定された人間関係をなんとかしようということも、審議会で合意は取れなかったとはいえ、何度か出てきている。しかし、今回はどのような課題があり、どうやって解決するのか、という案を出さないまま話をしたために、新たな学校教育の取り組み・動きを十分踏まえられないまま、以前の学校のイメージで意見が出されてしまったように感じるどころがいくつかあった。その最たるものが、審議会で前の校長会の代表だった方から出てきた「部活動の運営を学校の統合と別に考えて、社会体育など広い地域で独自の運営にしていくのはどうか」という意見である。これはワークショップの資料にも入っていたが、今のまとめを見ていただいても分かるように、部活の事を根拠にこの選択肢が良いという意見がかなり出ていた。

これには、ワークショップの進め方の問題もあったと思っている。ファシリテーターは、色んな意見が出るようにということで、極力、意見を否定するようなことはしなかったと思う。しかし、審議会としては部活の件については、今回ワークショップでは外して考えてほしいと言っているのので、それを根拠に色々と意見を言われた時に、軌道修正すべきではなかったか。3回しかないワークショップなので、審議会がどのように考えているかを参加者が理解することが大事だったわけだが、そのような意味では成果を十分に得られておらず、残念だと思う。

このような観点から、本当の意味で審議会で審議した中身をワークショップに提出して、それを理解いただいて議論いただけた結果がここにあるかということ、少し疑問だなというのが、私自身の率直な感想である。

今回、「教育水準の維持・向上の考え方」の中で、例えば、垂直統合案の中に、チェーンスクールという言葉が入ってきたが、部活については、何も書いていない。部活の問題と今回の学校統廃合の問題と切り離すという考えから、何も対応策を入れていないということであれば、次回のワークショップで参加者にも説明していただかないと、変な結論が出てきてしまうと懸念している。

(事務局) 部活動については、資料にまとめている通り、ワークショップにおいても、多くの御意見をいただいた。

部活動については、令和5年度からの休日への段階的な地域移行や、平日も含め、中学校と切り離していくという流れに、今後なっていくと思われる。

ワークショップでは、その時の最新の情報を資料とともに説明させていた

だいたのところである。本日、説明させていただいたのは第2回ワークショップの資料であるが、部活動の件について触れていないというのは確かにある。意見については、資料に追加させていただきながら、部活動について改めて説明させていただきたいと思う。

ワークショップ資料では、部活動について、審議会でこういう意見があるといった表現に留めている。審議会としては部活動を切り離すというところまで、はっきり言ってよろしいのかどうか確認させていただきたい。今後の資料作成は、その点を踏まえて作成させていただきたい。

(会 長) 部活動は、日本の学校教育において、大きな伝統と実績を持っている。子どもの最善利益を確保するには欠かせないものであるので、切り離すことは不可能だと思っている。その関連を抑えた上で、今後議論を進めていきたいと思う。

もう1つ委員からの重要な指摘は、「教育水準の維持・向上の考え方」の関連で、課題解決のための方策を示していくべきということである。デジタル技術・AIなどは、当然、教育現場に入ってくるので、それを踏まえた上で考えていくことが求められるということである。

(委 員) 部活をまったく切り離すということは、この審議会でも出ていない。学校単位での運営からは切り離す、というのが正確な表現だと思う。部活動の人間形成上の意義については、十分理解しているつもりである。いくら課外活動とはいえ、それを中学校から全く無くして良いとは考えていない。しかし、ワークショップにおける、部活動を根拠に統合を主張する意見に対しては、審議会では、合同チームの編成や地域移行の話が既に出ているということ、話してくれてもよかった。大泉の会場では、そのことを理解している元教員の方が、テーブルの中で軌道修正されてる場面もあった。資料の中身を理解して議論していただくという意味では、資料があつてよかったと思う。

(会 長) 審議会としては、部活動について、学校単位の運営から切り離すという考え方で統一したいと思うが、それでよろしいか。

(委員一同) はい。

(事務局) 今頂いた意見について、資料を修正しながら、次回ワークショップにおいても整理させていただきたい。

(委員) 先日、学校の評議員会で保護者から、もっと情報がほしいと要望があった。もっと情報共有をしていくことが大事だと感じている。地域によっては小学校で既にアンケートを取ったところもある。

(委員) ワークショップでは、ここでまとめられたことの他に、議論の前提となる意見がかなり出ていたと思う。

例えば、今回のシミュレーション自体に問題があるのではないかということ。人口増加、社会的動態ということを考慮しないでシミュレーションが行われているということが問題だとする意見である。また、北杜市の教育ビジョンそのものが全く見えない中では、議論ができないのではないかという、意見も出ていたように記憶している。さらに、審議会の考え方・立場はどうなっているのかという質問や、それに関して審議会が議論をしていないので、一体この3択をどのように考えたらいいいのか分からないという意見もあった。そのことが今回のまとめに触れていないので、そこをもう少し押さえてほしいと思う。

もう1つは、昨年度行われた地域説明会とどういう風に違っているのかというところが見えない。先程、部活の話があったが、論点として多くの意見が出されているのが、部活動と人間関係の問題である。人間関係というのは、コミュニケーションの質の問題であって、量の問題・人間の数の問題ではないということは、社会学的・心理学的にもいろんな方が支持されている。これは、水平統合したところで解決しないということ、ワーキンググループでかなりやったと思う。それが、前の地域説明会と同じパターンで何度も繰り返し出てきている。このところは、事務局はどう考えているのか。

(事務局) ワークショップでは、北杜市の教育ビジョンである「原っぱ教育」を資料でお示しした。市の教育をどうするかという意見は、数は少なかったものの、ご指摘いただいたような意見は確かに頂いている。今回資料に反映させてはいただいているが、今日の審議会、また、必要に応じてワーキンググループを開催させていただきながら、その辺のことを踏まえた資料で2回目のワークショップを進めたいと思う。

1回目のワークショップについては、資料を説明しながら、ワークの前半で、地域の参加者のお考えになれるメリット・デメリットを頂き、ワークの後半で、最も良いと思われる選択肢を選んでいただいた。前回の地域説明会と同じ意見も多かったが、1回目は参加者それぞれの考えを頂くと

いう形で開催させていただいている。頂いた意見を踏まえて、2回目はまとめていく進め方を考えている。

(事務局) 人間関係は量ではなく質であるというご意見について、これまでの議論の経過は理解している一方で、現状すでに子どもが少なくなっている地域の皆さんの話を聞いていくと、小規模であることのデメリットを潜在的に感じられて水平統合したいが、表現が精緻なものになっていないという部分があると思う。資料の中で、どう表現したら良いかという問題はあがあるが、地域の皆さんの想いとしては、小規模のデメリットを感じていて、規模を大きくすることによって改善したいという概念があったということは、補足させていただきたい。

(委員) この件に関しては、人数が多くなれば人間関係が解消されるという単純な構造ではなく、もっと少ない人数でも豊かな人間関係を育むことはできるはずだという議論も、ワーキンググループでかなりやったはずである。ところが、そういう提案が資料に示されていないために、ワークショップ参加者の想像が及ばず議論が小さくなるという構造になっている。これは、北杜市の教育ビジョンが見えないということともリンクしている。その辺を、きちんと運営側が理解した上で出していけないといけなし、審議会でも踏み込まないと、この議論が進まないと思う。

(委員) 今年度からの委員なので、過去2年間の議事録を読んだり、ワークショップも3回見学した。当然のことだが、地域の状況によって違うと感じた。例えば、須玉では中学生が100人位で危機感を持っている保護者が多いし、逆に高根では東小、西小から高根中学に進学しているので、満足している保護者が多い。武川ではPTAの役員がアンケートを取ってくれてあって、中学校49人と少ないので、何とかしたいという熱意が伝わってきた。ICTに関しては、ほとんど出てこなかった。次はもっと正確な情報を伝えて、国や市の状況を伝えていかなければならない。リモートで色んな交流が出来るようになっていくということは重要であるし、転機でもある。個人的意見だが、人間は同じ場所で同じ空気を吸って雰囲気を感じながら学ぶのが一番良いと思っている。そうではない提案も含まれているので、時代が変わってきていると伝える必要を感じた。人間関係については、学校の校長としてみても、量ではなく質であることは事実だ。多くなれば良いという単純な話でなく、学校が人間関係の改善や、良好な人間関係の構築を、汗を流してやっていかなければならないと

思っている。ただ実情としては、非常にうまくいっている学年があったとして、その子ども達そのまま中学校に入った場合はうまくいくと思う。問題があった場合では、中学校に行っても同じ問題に苦しむケースも見てきている。北杜市は小学生の不登校が多い状況で、中学に行っても不登校が改善せず、むしろ悪化したことがあった。なので、断言できないが、環境が変われば不登校の問題も変わる可能性があると感じている。

(会 長) 教育の現場は刻一刻と変わってきていて、社会の変化もある。特に子どもをめぐると問題では、不登校、いじめ、発達障害、子どもが親を見るヤングケアラーなどが社会問題化してきている。学校の現場は複雑化しており、解決のためには高度化が求められている。そのような中で、デジタル技術の重要性も高まっている。

(委 員) 小淵沢地区のワークショップに参加した。3つのグループ共に意見が活発だった。

なぜ統合なのかという目的がはっきりしないままの議論では、解を求めるのに無理があるのではないかと、北杜市がどのようなまちづくりをイメージしているのか、という意見も出ていた。水平統合というが、組み合わせがはっきりしていないので、解を出すのは難しいという意見もあった。また、提示された資料が大量すぎて読みこなせないという意見や、経済的側面に限った資料であったという意見があった。

小1プロブレム、中1ギャップという言葉が分からない方には分からないので、それは何か、また北杜市の現状で有るのか無いのかなど具体的に示さないと難しいと思った。

財政状況の健全化の目安として3.3%という数字が出ていて、組み合わせごとにクリアできる・できないの説明はあったが、そもそも3.3%は学校だけで担うものなのかという意見もあった。他の自治体では施設を複合化して、色んな施設を統合することで予算を削減するケースもある。学校だけにこの財政の負担を押し付けるのは疑問に思う。

審議会には既に6回やっているのに、その情報が届いていないと言われた。今このように進んでいるということをどこかで広く伝えていかなければいけなかったと思った。

地域説明会とワークショップに出席したが、出席するメンバーが違っていると繋がっていかないとも感じた。

(事務局) 財政の問題については、ワークショップ資料のp22にあるように令和8年

度時点で3.3%削減と提示してある。3.3%は、学校だけでなく全体の目安。ただ、市が教育に力を入れるということで、その他の予算を削減していくということも考えられる。この点は、丁寧に説明していきたい。審議会やワークショップの状況を広く市民に情報提供することについては、審議会の議事録をHPに公表している。ワークショップの結果については、今後、広報誌に掲載することを検討している。

(会 長) これまで審議会においては、社会の変化を見据えながら、子どもの視点、地域の視点を大事にしながら、何よりも大事なのは次代を担う子ども達の教育であり、それについて考えるという基本的な事は変わらない。

(委 員) 市の資料によれば、今後10年間で児童生徒数が3割減少する予想になっている。このペースでは20年後には児童生徒数は半分になる。全国的な傾向だが、特に地方でこの現象が顕著なのは、地方での就職の選択肢が少ないことがある。本来なら将来の働き手世代、子育て世代になる人が流出するから、児童・生徒数の減少に歯止めがかからない。流出を防ぐ手立て、呼び戻す手立てとしても、学校を考えられないか。コロナ過で、テレワーク、在宅勤務が広がった。北杜市は首都圏まで、電車、車で1時間半くらいなので、移住を呼び込めば人口減少のスピードを遅くすることができるのではないか。このようなことを実現するためには、都会の教育と差別化できる、北杜市の教育の特徴が必要である。働き手のUターンIターンの背中を後押しできる学校とはどんな学校なのかという視点でも考えたらどうか。

(2) 小・中学校へのヒアリングの結果について

(会 長) それでは事務局に説明を求める。

(事務局) (事務局より資料を用いて説明)

(委 員) ヒアリングは生徒会の役員が対象だったのか。

(事務局) 学校によって違う。

(委 員) 気になったのは、生徒会を中心に聞いた場合に、生徒会を構成する生徒の人間性が偏っていないかということ。人間関係良好で、活発な生徒の意見

となり、それとは反対の生徒の意見を吸い上げにくいと思った。  
色々な生徒の意見が引き上げられるような形でお願いしたい。

(委員) 過去に色々な規模の中学校に勤務してきたが、規模それぞれに良い所があって、課題があるので、何とも言えないと思っている。子ども達の意見は、色々なことを考えて意見を出してくれたと思う。

部活動と人間関係が焦点となっているが、現場の見方では、確かに中学校の部活は色々問題があって全てが課外活動で先生方の勤務時間以外で行うことになっている。先生方の働き方改革が言われているので、学校から切り離して地域に移行する動きが進んでいることは良いと思っている。

部活動を学校から切り離すことは理想だが、現実的にどうしていくのか、統合と並行して考えていかないと解決できないと思う。例えば、子ども達が言っているように、小さな学校では好きな部活ができないために、地域外の学校に色々な方法で通おうとしている、また通っている生徒がいて、ますます小規模化に拍車を掛けているということがある。また、どこか学校以外で部活動を行う場合、子どもがどうやってそこに移動するのか、指導はどうするのか、用具や場所を誰がどうやって移動するのかという具体的なことになると厳しいと思う。統合の議論とは別かもしれないが、同時に考えていかなければならない。そうしないと、子ども達の中学校生活の楽しみを奪ってしまうことになりかねないので、並行して考えてほしい。

人間関係については、小学校の時にクラスでうまくいかなくて、中学校でそれを挽回したいと思っている子達が沢山いると見ていて分かる。甲陵中学では選抜を経て来る子が多いが、学校の教育の内容で受験してくれる子がいる一方で、よくよく聞いていくと小学校の時の人間関係をリセットしたくて来たという子が結構いる。子ども達はそういうことを求めていると思う。教員としては、子ども達の集団生活がうまくいくように、それぞれの子達の様子をよく見たり、場合によっては保護者の対応をしたりして、学校生活が豊かに、みんなと仲良くやれるのを理想としている。最近では、色々なものを抱えている子ども達が増えて、先生方が対応をしているが、部活動の時間外活動以上に厳しいところがある。それに全精力を傾けてしまうと、授業や教育がおろそかになる。教員としてどちらを主にやるべきなのかを考えると、複雑な思いもある。子ども達は、人間関係をどんな集団にいても作れるような人ばかりではないので、先生方の負担になっているということが少なからずある。規模が大きくなったら解消されるかという、そうではない。新しい大きな所でなかなか自分が出せないという子もいれば、逆に小さい所にずっといるから凝り固まっていて、あの人は



こういう人だから、もうどうにもならないと思っている子もいる。人間関係のことは、一概に大きくすればいいとか、そのままが良いとか、どちらともいえない。規模が変われば、それに対応してやっていくということに尽きるとしている。

(委員) 自分が小、中学校にいたころから大きく変わってきていて、委員になって初めて聞く事ばかりである。自分自身の勉強不足もあるが、地域でも関心を持たなくなっている人が多くなっていることも課題だと思う。地域の教育については地域の協力が必要で、情報共有していきたいと思っている。

(委員) 子どもが少なくなっていることから、統合せざるを得ないと思う。ただ、方法がいくつもあるので、検討してより良い方向をつくってあげることが重要だと思う。  
初めてワークショップに参加して、昔、自分たちが統合した時のことを思い出しながら、次の世代につなげてより良いものにしたいと思っている。

(委員) 団塊の世代で何十クラスという中で生活したので、少人数は憧れだった。今回、統合というのを聞いて驚いている。子どもから見れば、選択肢があって多少は大きい方が良いと思うが、子ども達が地域から離れてしまう懸念がある。小学校が統合し、以前子どもがいた学校が荒れ果てていくのを見たので、統合はどうかなと思う。

(委員) 小中学校のヒアリングについて、児童会の役員にだけ聞くと、考えが偏るので、無作為に名簿から選ぶようなやりの方が良いのではないかと。小学校では中学校の表立った所しか見えていないので、一日入学が終わった後など、中学校の中を少しでも見た後に聞くと内容が変わってくるのではないかと。ワークショップに参加したが、3グループできる予定が、参加者が少なく2グループとなってしまった。色んな意見を聴くためにも事前の声かけをして参加者を増やした方が良い。また、1回の情報量が多く、理解するまでに時間がかかり、2時間では足りなかった。事前に説明会を行い、考えてきてもらって意見交換するなど、段取りよくやってほしい。他の保護者と話をすると、水平統合は頭にあるが垂直統合は考えていないので、事前情報があると色んな意見が出やすいと思う。

(委員) 子ども達の想いを大切にしたいと思っている。小中学校へのヒアリング結

果以外にも、色々な事を考えて子ども達は取り組んでいる。子ども達が適正化という事に対して、どのように思っているか。不安な事もあったりするが、全ての問題をクリアすることは不可能に近いと思う。その中で、今後、子ども達がどのような学校生活を歩んでいけるのかという所を、もう少し解りやすく伝えてあげるのも我々の役目ではないか。先程、委員からも意見があったが、子ども達の関心事は部活動の割合が多いと思う。ワークショップを進めるのに、部活動を切り離さない方が良いと思う。また、子ども達と近い現場の先生方の意見をヒアリングするのも良いと思う。

(委員) ワークショップ、ヒアリングの結果について、メリット・デメリット両方出てくるので、意見はまとめられない。市長が決めないと意見が収束しないのではないか。市のビジョンを示さないと、具体的な要望・意見は出てこないのではないか。また、財政的な問題や先生の問題は子ども達に考えさせてはいけない問題で、大人達で考えなくてはいけない。抽象的でなく具体的に示してもらえると良いと思う。

(会長) 今の意見は、教育ビジョンに関してですが、物事を解決するには2通りの方法があり、現在有る問題を掘り起こして、それを解決するにはどうするかという方法（フォアキャスト）と、将来のビジョンを示して、その目標を達成するにはどうするかという方法（バックキャスト）がある。今の意見は、ビジョンをもっと鮮明にした方がよいという意見でした。

(委員) 今日話を聞いて改めて感じたのは、ビジョンをどうやって具体化していくか。課題が挙がっていることについて、このように解決するという解決策が少なくともあることを示して、その上で議論をしていく必要があると改めて思った。

私も、ICT だけで交流していれば良いとは、まったく思っていない。オンラインとオフラインの両方が上手くいくと、小規模校を複数つないで授業をやっている子ども達が、運動会や体育会などで会うと、すぐに打ち解けられるという場面は、色んなところで何度も見てきた。私自身は現場にはいないが、幸いなことに研究対象が小中学校の小規模校の学校づくりやコミュニティースクールであったりするので、全国の数百校近くの学校を見てきた上での意見だと思って聞いていただけるとありがたい。

これから先、北杜市でチェーンスクールや部活動の地域移行等をしていくのであれば、色んな先生と出会う機会もあるし、子ども同士で交流する機

会も出てくる。なので、実際には解決策が見えているのに、審議会で十分議論がされてこなかったがために、ワークショップで意見が出てこなかったということのないようにしていきたい。

元々の目的はどのような統合をするのかという所なのかもしれませんが、この審議会で最初からあったように適正規模というのは元々財政的な都合でつくられているだけなので、本当の意味で子ども達にとって良い状態とは何か、どういう教育をしていくかを、この審議会で議論していいのであれば、取って付けたように部活動だけは外しましょうという話ではなく、ある程度意見をまとめてワークショップに示していかないといけないということだと思う。

(会 長) この審議会の名称は「適正規模等審議会」であり、この「等」が大事である。適正規模を議論するだけでなく、適正規模を含めた形で、教育の在り方や将来を担う子ども達の教育について、考えていくべきだと思う。

(3) 第2回北杜市立小中学校適正規模等検討市民ワークショップについて

(会 長) それでは事務局より説明を求める。

(事務局) (事務局より資料を用いて説明)

(会 長) 第2回のワークショップには教員も参加される。第3回は各地区3名の少数で北杜市全体の適正化について意見を聴く。審議会の予定は今年度一杯であり、今年度中に審議会のまとめを出すという予定でいるということであった。第2回、第3回のワークショップは重要な位置づけになるので、今日の議論も含めて内容を詰めていただきたい。

(委 員) 第2回ワークショップの日程がすでに定まっているので、これに対して今更どうこう言うつもりもないが、今日の審議会で何が決まったかというと何も決まっていない。つまり、第1回ワークショップを受けて私たちは意見交換した。色んなヒアリングの結果も含めて、色んな意見が出ているということはよく分かった。

しかし、北杜市の教育ビジョン等については、全く中身について議論していないし、審議会の考え方や立場を問われても全く答えることができない状況にある。

このまま第2回ワークショップをやると、また第1回と同じことが繰り返

返される可能性が非常に高いと思う。なので、本来ならば第2回ワークショップの前に、もう1回審議会をやらざるを得ないのではないか。その前に、ワーキンググループを開いて中身を検討し、議論のできる体制を組んで、第2回ワークショップの直前にもう1回審議会を開いて、きちんと審議会の考え方を第2回ワークショップで表明できるようにしておかないと、ワークショップの意味がないと思う。

(委員) 第2回ワークショップに現場の先生方が参加されることについて否定しないが、先生方が中立公正に話ができると思われるか。中立公正な姿勢をどんなに保っていても、小中連携のことを知っていて、地域連携のことを知っている先生でなければ、ご自身の経験からしか話せない。実際に各地区でコミュニティースクールに係わったことがあって、せめて小中連携について研究した事のある先生が、どれほどおられるかと言われれば、甚だ疑問である。

なぜこのような事を言うのかというと、コミュニティースクールに新たに來られた先生がコミュニティースクールのことを全く分からないというふうに、皆さん異口同音におっしゃる。小中連携・垂直統合について言えば、県内で実現しているところは、極々少ないわけなので、先生方が参加することは全く否定しないが、先生方が出るから中立公正だということは必ずしも言えないということ、少なくとも審議会のメンバーだけでも理解しておいてほしいと思う。

もちろん、皆が分からないとは言わないが、一般的には理解していないという事を理解しておいてほしい。

(会長) これまでも、審議会の前にワーキンググループで課題を整理してから議論してきているので、今回も実施するという事で進める。

(委員) 審議会の内容を校長会に伝達し、できる限り公正な立場で話ができるようにしたい。

(事務局) 第2回ワークショップの日程については、本日、案としてお示しさせていただいたが、本日の意見を資料に盛り込む必要があり、さらに審議会において議論をいただく必要があると考えるので、会長・副会長と相談させていただく中で、後日連絡させていただきたい。また、ワーキンググループについてもご意見をいただいたので、ご協力いただけるのであれば、ご相談させて頂き、開催していきたい。

(会 長) 第2回目のワークショップについては広報されているのか。

(事務局) 広報されていない。

(会 長) では、それを踏まえて事務局と相談したい。  
以上で議事を終了する。

終了